opusdei.org

## 黙想:諸聖人の祭日 (11月1日)

黙想のテーマ:「イエスが説かれた真福八端を生きる」 「聖性とは神の働きに委ねる こと」「聖徒の交わりに頼る」

2025/11/01

イエスが説かれた真福八端を生きる

聖性とは神の働きに委ねること

聖徒の交わりに頼る

「どのような人が、主の山に上り聖 所に立つことができるのか。 (…) それは主を求める人、ヤコブの神 よ、御顔を尋ね求める人」(詩編 24・3、6)。全教会は、諸聖人の祭日 の荘厳ミサでこの詩編を唱えます。 私たちもこの祝日をこのように過ご そうと望んでいます。「聖人と福者 は、キリスト者の希望のもっとも権 威あるあかし人です。彼らは、その 希望を、嬉しいときも苦しいとき も、人生の中で余すことなく抱き、 イエスによって教えられ、今日の福 音箇所(マタイ5・1-12)で読まれた 真福八端を実践したからです。真福 八端こそが聖性の道です | m。

しかし、イエスの説かれた真福八端 を思い起こすと、それが大いに励ま される展望ではないように思えま す。苦しみや迫害、戦いや苦労など は私たちが本能的に追い払うことで す。しかし、イエスはこれらの諸徳 を祝福され、それらは「人々を真に 幸せにし、聖人にする | と教えられ たと聖ホセマリアは言います。「イ エスは、ご自身の生活を通して教え たこれらの諸徳の実践を、全ての私 の子どもたちと私にお望みになりま した」[2]。こうして私たちは次のこ とを理解します。「聖性、すなわち 完全なキリスト教的生活とは、特別 な事業をなし遂げることではありま せん。むしろそれはキリストに結ば れることです。キリストの神秘を生 きることです。キリストの生き方、 考え方、態度を自分のものとするこ とです。聖性の度合いは、キリスト がわたしたちのうちで達する背丈に よって決まります。聖霊の力でわた したちがどれだけキリストの生き方 に基づいて自分の生き方を形づくる かによって決まります | [3]。それゆ え、全てはイエス・キリストの愛に よってでき得ることを理解すること

から生じる自由を取り戻すことが必要です。

今日、諸聖人は「私たちが真福八端 の道を歩むようにしと励まします。 「並外れたことをするのではなく、 私たちを天国に導くこの道を、家族 生活で実践することです。こうし て、未来をはるかに眺め、そのため に私たちが生まれたことを喜びま す。そこで、私たちは死ぬことな く、神の幸せを楽しむのです。主は 私たちを励まし、真福八端の道を歩 む者、皆にこう言われます。『喜び なさい。大いに喜びなさい。天には 大きな報いがある』 (マタイ5・ 12) | [4]

「どのような人が、主の山に上り、 聖所に立つことができるのか。それ は、潔白な手と清い心をもつ人」 (詩編24·3-4)。周知のように、こ

神が何かを頼まれるときは、実際には神のいのちとを私たちは承知とを私たちは承知ことを私たちは承知ことを私たちは承知ことを私たちは承のこれでは、では、不可には、ないます」では、の世でも、決しても、かりませば、この世で幸せは、この世で幸せは、この世で幸せは、この世で幸せは、この世で幸せは、この世で幸せば、この世で幸せば、この世で幸せば、この世で幸せば、この世で幸せば、この世で幸せば、この世で幸せば、この世で幸せば、この世で幸せば、この世で幸せば、この世で幸せば、この世で幸せば、この世で幸せば、この世で幸せば、この世で幸せば、この世で幸せば、この世で幸せば、この世で幸せば、この世で幸せば、このもないない。

ることのできる人のためである。私 のこの確信は日毎に強くなる」[7]。

天国の諸聖人たちのことを考えるの は何と喜ばしいことでしょう。私た ちと同じような、問題や困難、そし て希望があり、似たような弱さを 持っていたのです。私たちが彼らの ように、神の御働きに全生活を委 ね、忠実であるなら、人生の最期に 主のいつくしみ深い、この言葉を聞 くことができるでしょう。「さあ、 わたしの父に祝福された人たち、天 地創造の時からお前たちのために用 意されている国を受け継ぎなさい| (マタイ25・34)。時々、この国に は、わずかな人しか入れないだろう との思いが浮かぶことがあるかもし れません。しかし、今日の聖書朗読 は聖ヨハネの幻視を思い出させてく れます。そこには、「あらゆる国 民、種族、民族、言葉の違う民の中 から集まった、だれにも数えきれな いほどの大群衆が、白い衣を身に着

け、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立っている」 (黙示録7・9)のです。教会は、この数えきれないほどの大群衆において、この世において神の愛のうちにとどまり、天国において永遠の幸せを楽しむ、あらゆる年齢と状況の男

女を祝います。

る人、煉獄で償い中の人、地上を旅している人――と、私たちのいのちを育む愛徳の交流によって、つまり聖徒の交わりで、皆、つながっているからです。

前世紀の30年代に、スペインで吹き 荒れた戦争の間、聖ホセマリアは、 度々、子どもたちにしたためまし た。その中の一つに、次のことを保 証したものがあります。「私は皆と 一緒にいないだけです。しかし、昼 も夜も、私は、あなたたち一人ひと りに、寄り添っているのです。これ が私の使命ですから。今、この世で 主に栄光を帰しながら、後ほど、主 と共に幸せになるようにと願ってい ます」ほ。聖徒の交わりは人々の相 互間の祈りです。傷ついた人を癒 す、あるいは必要な力を増してくだ さるよう、恩恵をお願いするためで す。彼自身が話していたこの経験 は、度々繰り返されるでしょう。 「子よ、あなたが聖徒の交わりをど

れほど見事に生きているかがわかった。『きのう、わたしのために祈ってくださっていたのを〈感じました〉』と手紙に書いてきたからである」[9]。

「主はあなたの喜びのみをお望みです。あなたができるかぎりのことをすれば、たいそう幸福になれるはずです」「呵」。聖母は、私たちがキリストの御顔の美しさを映し出すための恩恵を、獲得して下さるでしょう。こうして、神がこの世界のため私たちに望んでおられる、聖性の大きなモザイク画を創るのです。

[1] フランシスコ、「お告げの祈り」でのことば、2020年11月1日。

[2] 聖ホセマリア、手紙31、52番。

- [3] ベネディクト十六世、一般謁見 演説、2011年4月13日。
- [4] フランシスコ、「お告げの祈り」でのことば、2018年11月1日。
- [5] ヨセフ・ラッツィンガー『神の働きに委ねる』2002年10月6日付オッセルバトーレ・ロマーノ紙。
- [6] 聖ホセマリア、ブルゴスでの小冊子1番(Cuadernillo-agenda 1° de Burgos, citado en Camino. Edición crítico-histórica, Rialp, Madrid 2004, p. 414)。
- [7] 聖ホセマリア『鍛』1005番。
- [8] 聖ホセマリア、ブルゴスの子どもたちへのアビラからの手紙、1938年8月11日。
- [9] 聖ホセマリア『道』546番。
- [10] 聖ホセマリア『神の朋友』141 番。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/mokusou-sho-seijin/(2025/11/09)